

後期倭寇研究の成果から見た、 16世紀東シナ海の政治・経済情勢と貿易陶磁

金沢陽（出光美術館 学芸員）

上田：続いて2組目の報告になります。金沢陽さんをお願いしたいと思います。現在、出光美術館の学芸員としてお仕事されておりますが、東洋陶磁学会の常任委員、貿易陶磁研究会の世話人をされております。研究テーマとしては明代の窯業が中心ですけれども、広く環東シナ海の交易という形で研究をされております。ご著書としましては『明代窯業史研究』（中央公論美術出版、2010年）他、多くの論文等を書かれております。それでは金沢さん、よろしくお願いします。

金沢：私は、今回の全体のテーマが「貿易陶磁と文献史料から東アジア・東南アジアの歴史を考える」というふうになっておりますけれども、そして「16世紀・17世紀を中心とした海域におけるヒト・モノの流れ」という大変なテーマが付いている集会に参加したにもかかわらず、そんなにいろいろ知っているわけではないので、私の守備範囲としましては、その前提となるような海域世界、その当時の政治経済情勢みたいなものを少し勉強したことがあるので、まとめて報告するのがせいぜいかなと思います。さらに17世紀については不勉強でございまして、また東南アジアの方はあんまり足を踏み入れたこともない不勉強な者ですから、今回は16世紀と、それから海域世界としては東シナ海のあたりに限ってお話をさせていただいて、何とか許していただこうというふうに考えておるわけでございます。

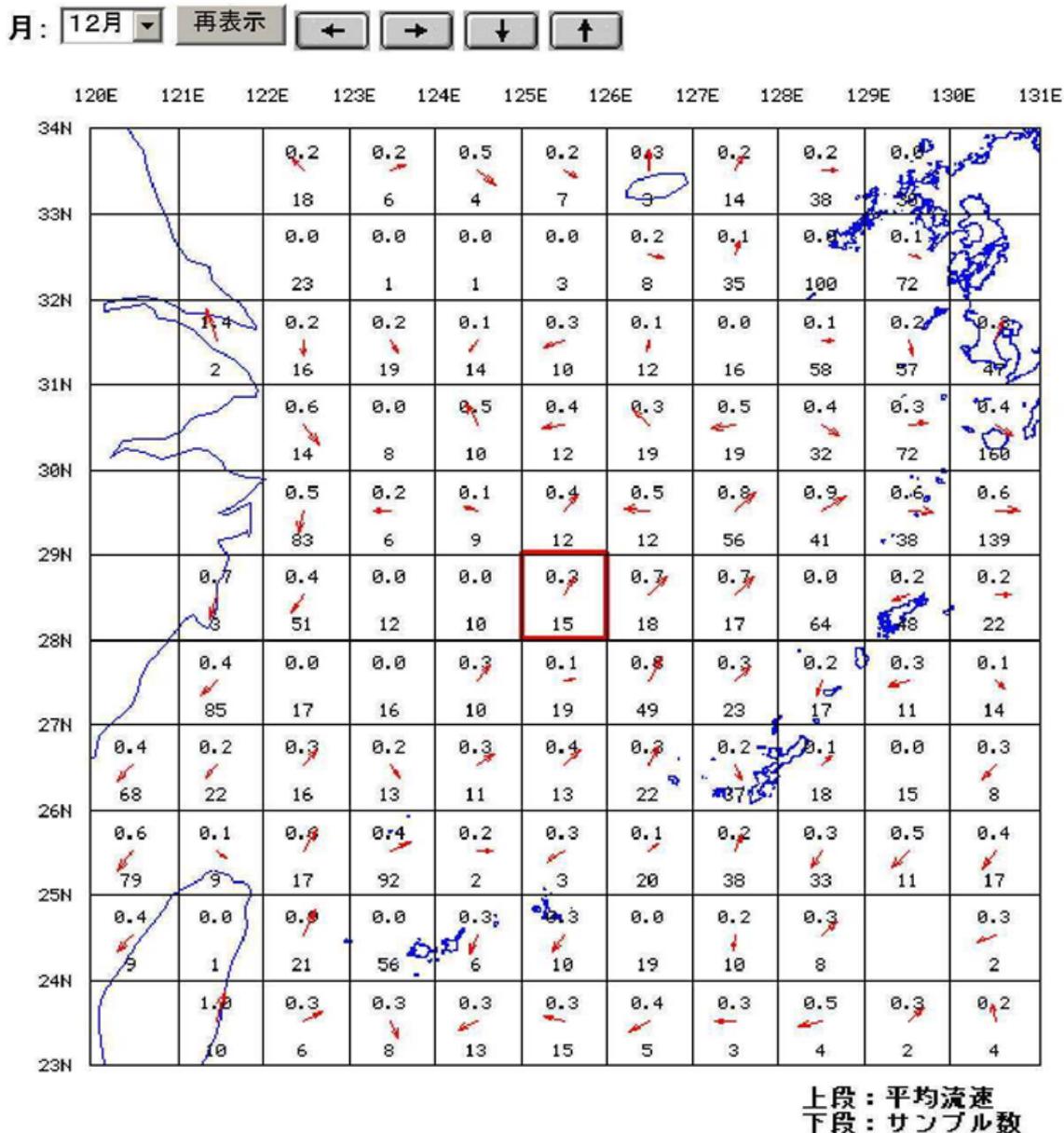
東シナ海海域の自然地理的条件と航路

はじめに東シナ海を取り扱うにいたしましても、その自然地理的な条件を共有しておかないと話が進まないと思ひまして、それをまず見ていただきたいと思ひます。図1は海上保安庁にあります海洋データセンターというところが毎月、何年間の平均になるんでしょうか、その海域の海流の流れなどをホームページに発表しているものの一例です。

実は私たちが奄美大島でもって沈没船らしい、海底から遺物が発見される場所の調査をいたしました。それが倉木崎海底遺跡という遺跡で、宇検村というところがございます。これが13世紀末ぐらいの沈没船か、それに関連した遺跡ということになるんですけれども、報告書を書くときに、このあたりのことの情報が必要だと思ひまして、初めてホームページ上で見つけたものであります。

ここに海流が示されておりますが、それと季節風の常識などをいろいろ織り交ぜて、この海域のことを確認したことがございました。ご承知のとおり黒潮ですね。これは北赤道流の分流とかいうのが正しい言い方の方でございます。黒潮は台湾の東側からこの東シナ海に入りまして、大体、南西諸島に沿って行って、種子島の南のあたりから太平洋に抜けるというのが本流のようで、一部はいろいろ分流をして流れて行きます。それらを総合しましたのが、図2の東シナ海の海域の図面です。下の方に断り書きがありますけれども、13世紀というのは先ほどの倉木崎海底遺跡の年代です。

このところには、言い訳をするわけじゃありませんけれども、魚釣台を表示してございます。これはご承知のとおり、私たちは魚釣台とか尖閣諸島とか呼んでおりますけれども、一部の方々というか、“大変大勢の方々”には釣魚台、あるいは釣魚諸島というふうには言わないと怒られちゃうということがありまして、中国でしゃべるときにはここをちょっと書き換えたりする姑息なことをやっております。英語ではThe Pinnacle Islandsというんでしょうか。そういうふうに表示されるところだそうでございます。

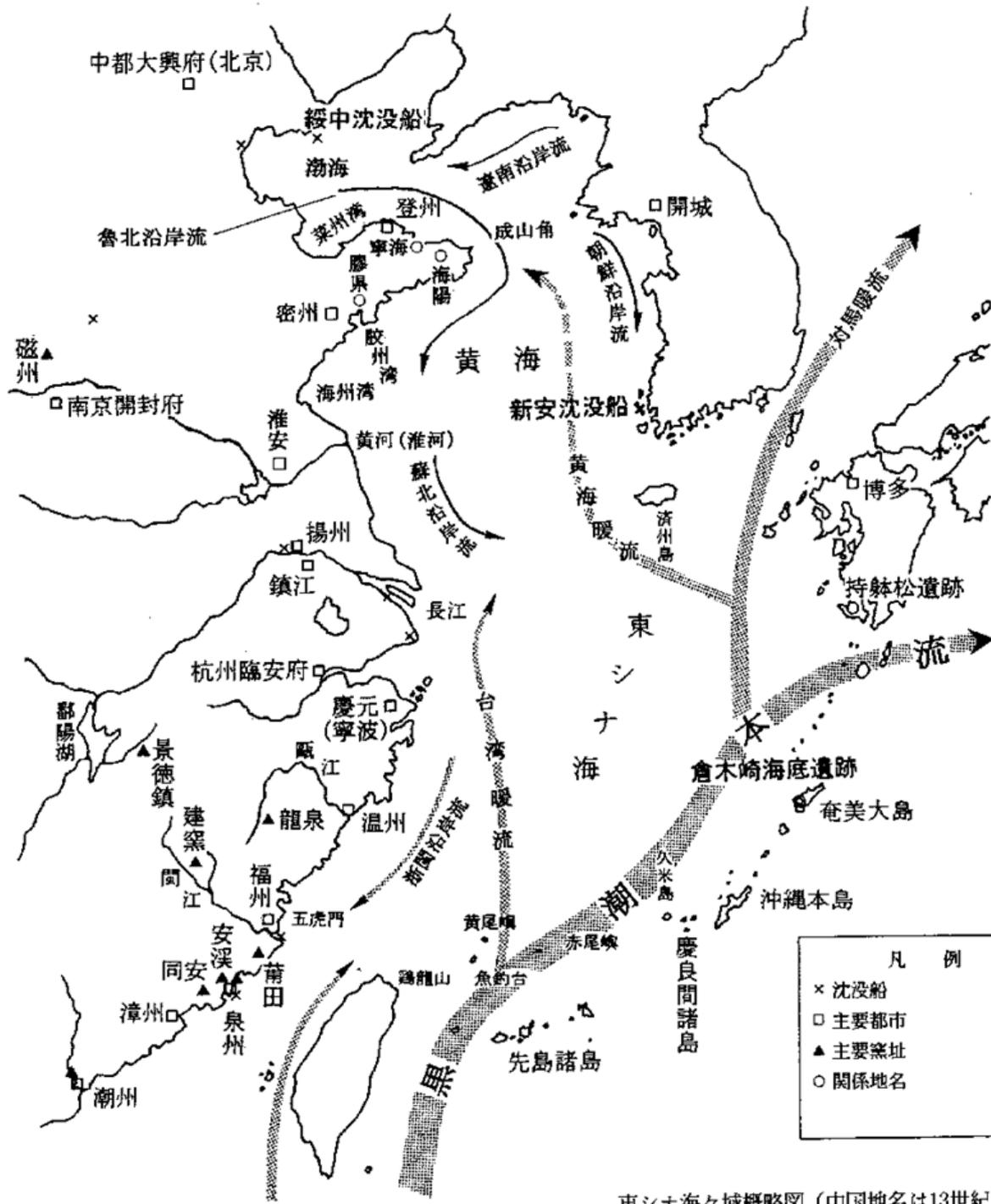


緯度: 28.00N - 29.00N 経度: 125.00E - 126.00E

平均流速 (ノット) : 0.3 平均流向 (度) : 35
 最大流速 (ノット) : 1.0 最大流向 (度) : 50
 安定度 (%) : 62 サンプル数 : 15

図1 東シナ海海流統計表示の一例 / 日本海洋データセンター公開データより
jdoss1.jodc.go.jp/cgi-bin/1997/ocs.jp

後期倭寇研究の成果から見た、一六世紀東シナ海の政治・経済情勢と貿易陶磁（金沢）



東シナ海々域概略図（中国地名は13世紀）

図2 東シナ海海域の海流／金沢作成、2001

この海域は今申しました黒潮が流れて、北上して、太平洋へ抜けて行くと同時に、一部は対馬海流になったり、また朝鮮半島の方に黄海暖流になったりでその分流が流れて行きます。また黄海暖流というのはとても緩やかな弱い流れのようでありまして、朝鮮半島の西側では潮汐の満ち潮、引き潮で起きる流れの方が勝ってしまうらしいんですけども、そのように基本的には黒潮の本流、分流の流れがここを支配します。

ただ、海流というのは一方通行に流れるだけじゃないらしく、必ず反流、反対方向の流れというのがあるんだそうですね。それが主に大陸側を沿って、黒潮とは逆方向に流れるということになります。またご承知のとおり、夏には南から季節風が上がって来て、冬には北から季節風が下りて来るということになります。ですから、それらを利用して、海流と季節風に順じて行く場合は非常に能率的に行ける。また海流に逆らって戻るときには、海流を横切る際にその季節風の力を利用するために、主に北風の季節にこれを南へ下がって行くというふうになるようでありまして。

それで見ますと、中国と高麗・日本を結ぶ航路としては、山東半島の諸港を起点として島伝いに朝鮮に至る航路と、長江の出口から北九州あるいは朝鮮半島南部の方に直航する航路、もう一つは福建省から琉球・南西諸島を経て九州に至る航路。この三つが合理的で、より安全な航路であったようでありまして。ちなみに倉木崎のところを通過していた沈没船があるとすれば、福建のあたりから南風と海流に乗って琉球のあたりに来て、それから南西諸島に沿って九州の方に上がって行くという往きと、帰りは九州から出てきたとしますというと、島伝いに沖縄本島のあたりまで来て、慶良間諸島の先の久米島あたりで風待ちをして、ここから先が黒潮を横切らなきゃならないわけですから、北風のいいときに何とか黒潮を突っ切って、どちらかという大陸沿いの黒潮の反流、南に下がっていく流れに何とか乗っかって、福建省の方に帰って行くというのが自然の摂理であったようでありまして。

よく遣唐使の人たちが“南島路”というんでしょうか、奄美大島のあたりから浙江省の方に渡る。明州(寧波)の方に渡るというのは、これで見ますと実に無理なことだったのでありまして、いつも流れている黒潮にとにかく押し流されて、翻弄されてしまうので、極めてまずい航路で、しょっちゅう難破したらしいですね。五島列島の三井楽ですか、あそこから長江へ行って寧波あたりに行く(南路)のが、一定の合理性があったというふうには考えられるわけでありまして。

こういった流れと自然の摂理に沿った状態に支配されながら、この海域を巡る各国の政治経済情勢みたいなものがそれに影響を与えたというのが、この世界の在り方を特徴づけたというふうには言ってよろしいんじゃないかと思えます。

後期倭寇研究の流れ

私の表題に「後期倭寇」と付けさせていただきましたけれども、後期倭寇というのがちょうど16世紀の頃にこのあたりを騒がしたということで、皆さん、よくご存じのものであります。後期倭寇のきっかけと申しますのは、これもご承知の動きだと思いますけれども、嘉靖2年(1523)の寧波争貢事件であったと言われております。

寧波争貢事件につきましては『明史』に有名な記載がございます(史料1)。嘉靖2年に日本使宗設・宋素卿、道を分けて入貢し、互いに真偽を争うと書いていますね。市舶中官の頼恩が素卿の賄賂を納め、素卿を右(優先)とするや、これに不満の宗設が、遂に寧波を大掠したということでありまして、この日本使の宗設というのが、これは大内氏が仕立てた船を3隻ばかり率いて行った。先に着いていたにもかかわらず、宋素卿——これ、細川氏の仕立てた船に乗って、たった1隻で後から着いたのですね——が、分が悪いので、賄賂を贈ってうまいことやったというのに怒って、この宗設が寧波で刃傷沙汰を起こして、その辺を荒らし回ったということがあって、それを重大視した明朝側が、以降、日

史料1 『明史』巻81、志五十七、食貨五、市舶

嘉靖二年、日本使宗設・宋素卿分道入貢、互争真偽。市舶中官頼恩納素卿賄、右素卿、宗設遂大掠寧波。給事中夏言言倭患起於市舶。遂罷之。市舶既罷、日本海賈往來自如、海上姦豪與之交通、法禁無所施、轉為寇賊。

嘉靖二年、日本使宗設・宋素卿道を分ちて入貢し、互ひに真偽を争ふ。市舶中官頼恩素卿の賄を納め、素卿を右とするや、宗設遂に寧波を大掠す。給事中夏言言ふ「倭患市舶に起る」と。遂に之を罷む。市舶既に罷むも、日本海賈の往來自如、海上の姦豪之と交通し、法禁施すところ無く、転じて寇賊と為る。

本の入貢を厳禁するということがあった。これが寧波争貢事件とされているもので、それ以降、いわゆる倭寇の活動が激化したというふうに言われています。

それ以前の明代の初めから15世紀あたりまでは、いわゆる華夷秩序にのっとり朝貢貿易が、この海域では琉球、あるいは日本、朝鮮との間で中国が取り結んでいた秩序のある貿易であったわけです。またもちろんそれに反する密貿易、私貿易も行われていますが、あくまで朝貢貿易というものが意識されたうえでの私貿易、という時期であって、このやり方が建前上の正しいやり方であったところが、それがこれで日本は来ちゃならんということによって完全にシャットアウトをしたものですから、それに対していろいろな事情から反乱を起こしたり、海賊行為を行ったりというのが、後期倭寇の一つの、一般的にいわれる状況であったというふうには言ってもよろしいのではないかと思います。

その後期倭寇対策で、いろいろな明朝の知識人とか軍人、あるいは官僚の人たちが、その対策を提案したり、感想を述べたりする文書を比較的多く残しているわけですね。それが『経世文編』とか『籌海図編』とか、かなり豊富に残っている。それが良い史料になっておりまして、今回引用している資料もほとんどその辺のものです。これらの文献中に、この海域世界に対して影響を与える、圧力を加える、先ほどの自然の摂理にのっとり海の見え方に、さらにいろいろな制約となる条件を与えるものが、幾つか読み取れるのではないかと、以下の発表を組み立ててみたいと考えているわけです。

現在の中国に近づいてまいりまして、やはり倭寇の問題の研究は大変たくさん行われたことが知られております。大体、中華民国の初めぐらいから朝鮮戦争ぐらいの時期には、主にこれは日本の海賊のイメージがまだまだ表に立っておりまして、この倭寇に対する戦争は、日本の侵略行為を一方に思い描きますから、対外的な防衛戦争だという感じで捉えられていたようでありまして、將軍たちは一つの英雄像として取り上げられるということがあったと思います。それが、新中国が成立してからも朝鮮戦争の頃まではそれが主流であったようでありまして、新中国が何と申しまして、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想の建前でやっておりましたので、これは反封建勢力が台頭して、明朝側と戦われた階級闘争であったということが非常に言われるようになってきました。それが特に変化したところであったと思います。

ただ、その中で、もちろんその研究がどんどん行われておりますけれども、やがて80年代になって、改革開放時代に中国がなると、その中で、それ以前から資本主義萌芽論争などが起きて、中国社会の中で明代後期、経済社会の大きな発展が生じたという、その現象にこの後期倭寇を位置付けて検討する傾向が出てまいりました。

いろいろな人がそれを論じていまして、参考文献の中で熊遠報さんの論文（「倭寇と明代の『海禁』——中国学界の視点から」大隅和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、1997）はそういったことを要領良くまとめているので、後でご参照いただければと思うんですけども、倭寇が新たな位置付けをもって語られるようになっていく。そしてその中でたくさんの史料を、倭寇研究ということで、いろんな先生方が掘り起こしてくださった。その結果、東シナ海を取り囲む、特に私の場合中国側ですけ

れども、周辺の社会経済の在り方が明るみに出て来て、それが今回扱う東シナ海世界のヒトやモノの流れを制約している状況を示すことができる、というチャンスが出てきたというのが今日的な状況ではないかと考えております。

明代社会経済の発展と東シナ海海域をめぐる諸事情

15世紀までの東シナ海海域が、先ほど申しましたように、朝鮮、日本、琉球が一方にあって、中国との間で朝貢関係を取り結ぶという状況が中心だったとしますという、16世紀というのは、それに新たな要素が加わってきたということにまず注意しなければいけないと思います。それはポルトガルが進出して来たということに他なりません。1511年、マラッカにやっけてまいりますし、1517～18年には広東にやっけてまいります。そういったことで、東シナ海の方にだんだん迫って、やがてこちらの方にポルトガルが進出します。そうなりますと、いわゆる華夷秩序に規制されていた東シナ海の世界に関係ないぞという人たちが入り込んで来る。ポルトガルは明朝ともそうですけれども、各国と関係を取り結びますので、いろいろなやり取りが多角化した感じになってくるのが16世紀であるということでもあります。

そして、先ほど申しましたように、寧波争貢事件が1523年、嘉靖2年に起こりますという、明朝方はこれを軍事的に押さえれば、そういったことが治まるという考え方にどうも立ったようで、秩序を乱す者は許さんということで、何をしたかといひますと、市舶司という、外国貿易を管理する役所を取り払ってしまうんですね。そこにやがてオランダが入ってさらに複雑化した情勢が生じてきますから、実際にこの海域を取り結ぶ人たちは、自分たちの実力で東シナ海の秩序を維持しなきゃならない。貿易関係、商業取引にしても何にしても、それを維持していかなきゃならない環境に投げこまれたということが言えると思います。

そういう関係がいつまで続くかっていうと、日本の鎖国が行われるときまでは、基本的にそういう状態がこの海域の一般情勢と言ってよろしいのではないかと思います。日本が鎖国を行いますという、今までと違って、最近では鎖国というのは実はそんなに鎖国じゃなくて、琉球を通じたり、朝鮮の方では宗氏を通じたりして、けっして完全に閉じていたわけではないというふうな研究が盛んになってきていますけれども——、日本の私貿易船が消えてしまったことは間違いのないことでありまして、そうなりますとやはりこの東シナ海情勢は一つの変化を遂げますから、大体そのあたりまでがこの後期倭寇時代の続きということになるのではないかと思います。

【明朝の軍事政策の破綻】

とにかく争貢事件以来、市舶司を廃止して政治的に抑え込んでしまえば大丈夫というのが明朝の考え方。これは明の洪武帝の時代の初めの頃に、海上に逃れた反対勢力などを海禁政策でもってうまく抑え込んだ。軍事的には効果があったというのが頭にあるでしょうから、その続きとして行われたことになっていると思います。それに対しまして、実はこの海域の周辺では、経済的にその頃とは違った状況になっていたんだということが軋轢

史料2 張燮『東西洋考』巻6、外紀考、交易

自市舶罷而倭不能来、射利之徒、率多潜往、倭輒厚結之、欲以誘我。乃舶主之黠者、至冠進賢、衣綺繡、詭稱閩撫材官、與重申互市之約。……

市舶を罷めてより倭来ること能わず、射利之徒、率ね潜往するもの多く、倭輒ち厚く之と結び、欲して以て我を誘ふ。乃ち舶主之黠（かつ）者は、進賢を冠し、綺繡を衣し、閩撫の材官を詭稱し、與に互市之約を重申す。……

生む結果になって、洪武帝の時代とは違う結果になっていったということを示す史料が幾つかございます。

例えば**史料2**などがそれに当たるかと思えます。市舶司を罷めた後の状況の一つの説明になっておりまして、市舶をやめてより、倭が来ることができなくなり、利益を得ようとする射利の徒は潜往する（地下に潜る）者が多く、倭は厚くこれと結び、欲してもってわれを誘う。すなわち舶主の悪賢い者——黠者は進賢（文官）の冠をつけ、綺繡をまとい、閩撫（福建巡撫）の武官を詭称し、共に互市の約束をなすということでもありますから、市舶司を廃止して貿易を禁じて、実はそんなことでは治まらなかったという状況がここに出てきております。

いずれにしても、中国側では絹織物とか陶磁器などの商品生産がどんどん進んで、明代後期のことでありますから、大発展をしている。それが資本主義萌芽論争、後世の資本主義的な生産様式の萌芽すら見られるような、資本家と無産階級みたいな者の間で生産関係が取り結ばれるようになってきている。陶磁器の方で申し上げますと、明代後期になりますと、景德鎮の陶磁器などは既にもう中国の全国市場を獲得してますね。全国にシェアを持って大量な商品を輩出している。それを輸出しようという圧力も非常に高まっていることになりますから、当然、市舶司が廃止されてしまっただけでなく、それと矛盾することとなってしまいます。

また、日本は倭寇の“伝統”がありますので、中国明朝からは非常に遠ざけられてはおりましたけれども、何回か朝貢貿易をいたしますと、行った先で宮廷の朝貢品は別としましても、附搭貨物として持って行ったものについての貿易が認められておりましたから、それらがここで一斉に駄目になるってことになりますと、日本側の戦国期の支配者層などを中心とした人たちの、中国の高度な文物に対する需要なんかについても非常に圧迫されることになり、やはり貿易関係がひそかに続くということにならざるを得なかった情勢が見て取れると思えます。

【私貿易の規模】

それらが小規模なものではなくて、なかなか大規模だったことが幾つかの史料からうかがわれています。**史料3**の『明世宗実録』では、争貢事件の後、海禁を強めますけれども、海禁は何年かおきに海禁の命令が出ますが、それにかかわらず実にたくさんの方が海へ出て行った様子があります。漳州の人、陳貴らがひそかに大舡に乗って下海通番し、琉球に至り、その国の長史通事蔡廷美らに招き入れられて入港したということですね。実はこの後、ここで広東から来た、中国人同士だと思わなければならないけれども、潮陽の海船に会い、利を争い、互いに相殺傷するという刃傷沙汰も起きるほど、ここに輻輳しております。

史料3 『明世宗実録』巻261、嘉靖二十一年五月庚子

初、漳州人陳貴等私駕大舡下海通番、至琉球、為其国長史通事蔡廷美等招引入港。適遇潮陽海船、争利、互相殺傷。

初め、漳州の人陳貴等私かに大舡に駕して下海通番し、琉球に至り、其国の長史通事蔡廷美等に招引せられて入港す。適たま潮陽の海船に遇い、利を争い、互いに相ひ殺傷す。

それから先ほども見た**史料1**の終わりの方、「宗設遂に寧波を大掠す」の後なんですけれども、給事中の夏言という人が次のように言った。「倭患市舶に起る」。市舶司があるからいけないんだと言ったんですね。「遂にこれを罷む。市舶既に罷むも、日本海賈の往来自如」。この自如というのはちっとも変わらない、元のままだという意味でありますので、市舶を禁じたけれども、日本の商人が構わずやって来る。「海上の姦豪、これの交通し、法禁施すところなく、転じて寇賊となる」ということで、中国側の姦豪——悪い

やつらがこれと結んで、法を犯して、海賊となっているということが嘆かれているわけがあります。

具体的なものとしましては漂流民の取り扱いの記事なんですけれども、**史料4**の嘉靖26年に『実録』に出ているところでは、朝鮮國王の李峘、人を遣わして福建下海通番の奸民341人を送り戻し、次のように言ったと。福建人民の古く泛海——海にこぎ出して、本國——朝鮮に至る者は無かったが、この頃、李王乞らが始（初）めて日本に行つて市易しようとし、風のために漂流して来たというんですね。そして今、また馮淑ら、前後ともに1,000人以上、皆、軍器、貨物を夾帶するを獲う。1,000人以上が商品などと、ついでに武器などを持っているのを捕らえた。これより前、倭奴には火炮は無かったのに、今すこぶるこれあるは、この輩これを闌出——やたらに持ち出したからだろう。ゆえに兵端の起こり、患を本國に残すを恐るるといふうに言ったんですね。既に341人から始まって、1,000人以上の者が漂流したのが、朝鮮王朝の方で捕らえたのか、保護したのか、それを送り返して来てるといふことになっております。

史料4 『明世宗実録』卷321、嘉靖二十六年三月乙卯

朝鮮國王李峘、遣人解送福建下海通番奸民三百四十一人、咨稱、福建人民故無泛海至本國者。頃自李王乞等始以往日本市易、為風所漂、今又獲馮淑等前後共千人以上、皆夾帶軍器貨物。前此倭奴未有火炮、今頗有之、盖此輩闌出之。故恐起兵端、貽患本國。

朝鮮國王李峘、人を遣わして福建下海通番の奸民三百四十一人を解送し、咨稱すらく、福建人民の故く泛海して本國に至る者無く、このごろ李王乞等始めて以て日本に往きて市易せんとし、風の為に漂ふ所となりてより、今又馮淑等前後共に千人以上、皆軍器貨物を夾帶するを獲ふ。此より前倭奴未だ火炮有らざるに、今頗る之有るは、盖し此の輩之を闌出するなり。故に兵端の起こり、患を本國に貽すを恐るると。

同様のものでは、先ほどの陳貴が出てくるのが**史料5**にまたございます。陳貴ら7名はもともと明の禁令をたがえ、下海通番、商売して利を得ていた。今次たまたま広東省の潮陽の海船21隻、水手（船員）1,300名と称するのに出会って、彼此利を争い、互いに相殺傷すといひますから、嘉靖21年に陳貴が琉球で起こした事件は相手方だけで1,300人いたということです。非常にこれまた多くの人々が、市舶司がなくなった後も海に出て、そしてまた海商——海の商人たちが集団的な武力も行使してるといふ様子が見て取れるわけであります。

史料5 『明経世文編』卷219、嚴嵩南宮奏議 嚴嵩「琉球國解送通番人犯疏」

陳貴等七名、節年故違明禁、下海通番、貨賣得利。今次適遇潮陽海船二十一隻、稱水一千三百名、彼此爭利、互相殺傷。

陳貴等七名、節年故より明禁を違へ、下海通番、貨売して利を得。今次適たま潮陽の海船二十一艘、水一千三百名と稱するに遇ひ、彼此利を争ひ、互に相ひ殺傷す。

【私貿易の場】

それから、どのように中国に来て取引をしているかということにつきましては、東シナ海に面した浙江、福建、広東の海岸沿いに非常に多くの島があります。どうもこういう所に日本の船と、それと取引する者が集まっている情勢が見て取れるわけであります。**図3**の丸印の所は舟山列島といひます。寧波の東側にある多島海でありまして、非常なメッカであります。同じように、浙江、福建の海岸沿いには、台州だ、温州だ、そのあたりに島がいっぱいありまして、このあたりに船が集まって行ったのがこの頃の情勢のようであり

後期倭寇研究の成果から見た、一六世紀東シナ海の政治・経済情勢と貿易陶磁（金沢）

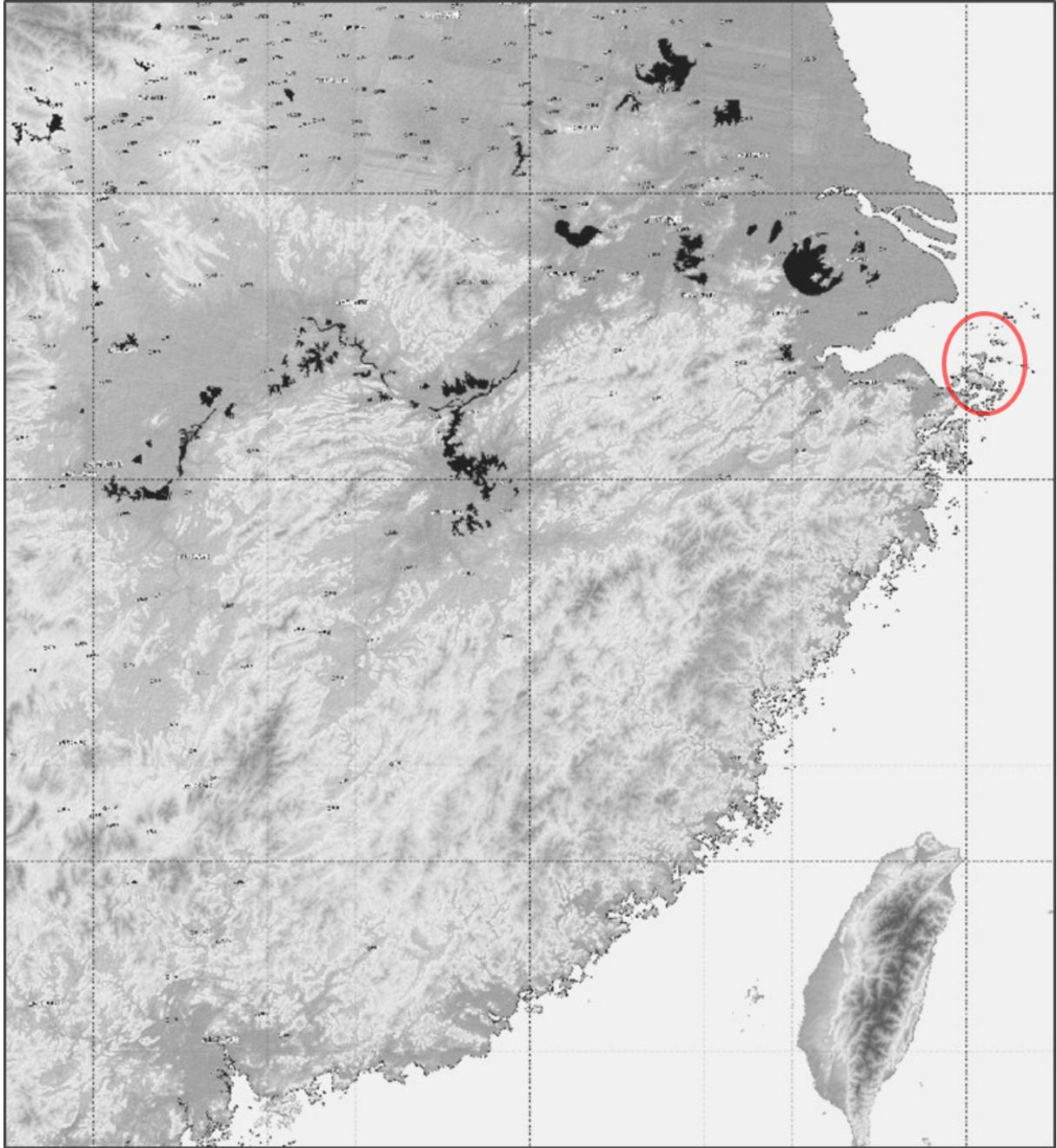


図3 江南地方地勢図

ます。一方では東側に行きますと、日本の五島列島とか、薩摩あたりの島々がそれに対応する場所と考えてよろしいのではないかと思います。

史料6が嘉靖26年のことです。浙海の賊船——浙江省のそばの海海賊の船で外洋を往来しているのが1,290艘余りだと瞭報——報告されたということでもありますので、大変な数の船がこのあたりに、舟山列島のあたりにどうも集まっていたようでございます。

それから、**史料7**もそういうことになりまして、やはり島を拠点にしていることが分かります。「西亭餞別詩序」は二編ありますが、いずれもそのことが描かれております。拠点についてはそういうことで、こういった島々に中国の商人、日本の商人が集まっていたという情勢ですね。

史料6 『明経世文編』巻205、朱中丞璧餘集一 朱紉「雙嶼填港工完事」

五月十日、浙海瞭報賊船外洋往来一千二百九十餘艘。

五月十日、浙海賊船の外洋往来すること一千二百九十餘艘を瞭報す。

史料7 『明経世文編』巻147、張文定甬川集 張邦奇「西亭餞別詩序」

然閩・廣之地富商遠貨、帆檣如櫛、物貨浩繁、應無虛日。

然るに閩・廣之地、富商遠賈、帆檣櫛の如く、物貨浩繁、應に虚日無かるべし。

甬東為海岸孤絶處、蛟門虎蹲古稱天險。高麗・日本・暹羅諸番航海朝貢者、皆抵此登陸。……每歲孟夏以後大舶數百艘、乘風掛帆、蔽大洋而下、而温・汀・漳諸處海賈、往往相追逐、出入蛟門中。

甬東は海岸孤絶の處、蛟門虎蹲し古くより天險を稱す。高麗・日本・暹羅諸番の航海朝貢する者、皆此に抵りて登陸す。……每歲孟夏以後大舶數百艘、乘風掛(けい)帆、大洋を蔽ひて下り、温・汀・漳の諸處の海賈、往往相ひ追逐して、蛟門中を出入す。

【日本銀の需要】

それから、日本は中国の銭を入れて経済を営むというところがございました。新安の沖合で沈んでいた船からは、船底から大量の中国銭が出て来たことで知られておりますけれども、その頃の時代もそういうようなことでありました。ところが、この16世紀に入りますと、その30年代ぐらいから中国では銀を使うことが解禁されております。そのために中国经济発展の中で、相対的に銀が不足していく。これは非常に深刻なものであったようでもあります。それに対して、1533年でしたか、世界遺産の石見銀山で灰吹法という新しい方式で大量に銀が生産できるようになっていく。そうしますと、日本側はその銀を持って行って中国の商品を買い入れたい。逆に中国側は銀を需要するというので、非常にこの海域に対して貿易をしろという圧力が、この銀の流通によって起きてきたということがあ

史料8-1 鄭若曾『籌海図編』巻4、福建事宜

一漳・潮乃濱海之地、廣・福人以四方客貨預藏於民家、倭至售之。倭人但有銀置買、不似西洋人載貨而來、換貨而去也。……以致出海官軍不敢捕獲、不若得貨從賊無後患也。

一漳・潮は乃ち濱海之地、廣・福人四方の客貨を以て民家に預藏し、倭至らば之に售る。倭人は但り銀有りて置買し、西洋人の貨を載せて来たりて、貨に換えて去るに似ざる也。……出海の官軍至を以て敢へて捕獲せず、貨を得て賊に従ふは後患無きに若かざれば也。

り得ると思います。史料8-1によれば、西洋の人が貨と貨の交換をするのと違い、倭人だけは銀と商品との交換取引するのだとしています。

【私貿易の利益の大きさ】

その結果も含めまして、史料9を見ていただきます。これは『天下郡国利病書』でありますけれども、ひそかに大船を造って日本に越販すると、1倍をもって100倍の息を博す—利益を集めるということでもありますから、大変な利益がここで生まれる海域になっていったことがわかります。

史料9 顧炎武『天下郡国利病書』巻93

私造大船越販日本者、其去也、以一倍而博百倍之息。

私かに大船を造りて日本に越販する者、其の去くや、一倍を以て百倍の息を博す。

【貿易に乗り出す地域集団】

また、史料10を見ていただきますと、柯喬が漳州・泉州の商人と密貿易する佛郎機船を攻撃したが商売するものが跡を絶たず、朱紘が海禁を厳しくしたけれども、そもそも海濱一帯が農業生産に恵まれないため、一つは富家は貨を徴め、貧者は傭と為り、交換により省外から米を得る。そのような事情でこの地域で貿易に乗り出すようになっており、もしこれを禁じれば困窮して乱を起こしたり、逃亡して外夷を招き入れたりしかねないことが指摘されています。

史料10 張燮『東西洋考』巻7、餉稅考

（嘉靖）二十六年、有佛郎機船載貨泊浯嶼、漳・泉賈人往貿易焉。巡海使者柯喬發兵攻夷船、而販者不止。都御史朱紘獲通販九十餘人、斬之通都、海禁漸肅。顧海濱一帯田盡斥鹵、耕者無所望歲、只有視淵若陵、久成習慣、富家徵貨、固得稗載歸來。貧者為傭、亦博升米自給。一旦戒嚴不得下水、斷其生活、若輩悉健有力、勢不肯搏手困窮、於是所在連結為亂、潰裂以出。其久潛蹤於外者、既觸網不敢歸、又連結遠夷、鄉導以入。……

（嘉靖）二十六年、佛郎機船の貨を載せ浯嶼に泊する有り、漳・泉の賈人往きて貿易す。巡海使者柯喬兵を發して夷船を攻むれども、販者止まず。都御史朱紘通販九十餘人を獲り、之を通都に斬し、海禁漸く肅す。顧みるに海濱一帯の田盡く斥鹵にて、耕す者歳に望むところ無し、只だ淵を視ること陵の若く、久しく習慣と成り、富家は貨を徴め、固より稗載して歸來するを得。貧舎は傭と為り、亦た升米自給するを博る。一旦戒嚴して下水を得ざれば、其の生活を断ち、若し輩悉く健やかにして力有れば、勢い搏手困窮するを肯ぜず、是に於いて所在連結して亂を為し、潰裂して以て出ず。其の久しく外に潛蹤する者は、既に網に触れて敢えて帰らず、又遠夷に連結し、郷導して以て入る。……

そして、**史料 8-2**では、「著姓の宦族（官吏）を首謀者として、番舩が近郊に停泊すると、張掛旗號——堂々と旗印を掲げ、人もまた誰何すべからず——咎められない。その異貨を他境（省）に運んで行くときは、甚だしきに至っては其の關文（公文書）を籍し——記録し、明らかに封條（封じ紙）を貼り、官夫を役して、もって境を送出して、京に至らしむる者あり」ということで、名のある地方官僚の人たちが官の荷物と騙って貿易を推進するようになっていったということが言えると思います。

史料 8-2 鄭若曾『籌海図編』巻4、福建事宜

又云沿海之人趨重利接濟之人、在處皆有。但漳・泉為甚。餘多小民勾誘番徒、窩匿異貨、其事易露而法亦可加。漳・泉多倚著姓宦族主之。方其番舩之泊近郊也、張掛旗號、人亦不可誰何。其異貨之行于他境也、甚至有籍其關文、明貼封條、役官夫以送出境至京者。……

又云ふ、沿海之人の趨重利接濟之人は、在處皆有り。但し漳・泉甚だし。餘は多小民の番徒を勾誘し、異貨を窩匿し、其事露れ易くして法も亦た加うる可し。漳・泉は多く著姓の宦族に倚りて之を主とす。方に其れ番舩之近郊に泊する也。旗號を張掛し、人も亦た誰何するべからず。其の異貨の他境に行く也、甚だしきに至っては其の關文を籍し、明らかに封條を貼り、官夫を役し以て境を送出して京に至らしめる者有り。……

【貿易勢力の情報力】

それからもう一つは、商人集団につきましては、非常に情報力が強いということが言えます。**史料 8-3**によりますと、福建では、もし倭人が福建に至れば船を海路用に改造して取引に行き、倭人が浙江の沙板・雙嶼等處に至れば、すぐに船を出してそこへ至る。仮に未だ倭人が至らなかつたり、他の港に至つたりした場合でも、人づてにこれを知り、どこかに貨至れば他の何處でも知らない者は無いということでもあります。

史料 8-3 鄭若曾『籌海図編』巻4、福建事宜

一倭人至福建、乃福人買舟至海外、貼造重底、往而載之、舟師皆犯量彈之人也。若至沙板・雙嶼等處訪之、則某家船將至。未至及至某澳、自有人說而知之、一處貨至、各處無不知者。

一倭人福建に至り、乃ち福人舟を買ひて海外に至り、重底を貼造し、往きて之に載せ、舟師皆犯して量彈の之人也。若し沙板・雙嶼等處に至りて之を訪へば、則ち某家船將至る。未だ至らざる及び某澳に至るは、自ら人說有りて之を知り、一處貨至れば、各處知らざる者無し。

【異業種からの参入】

史料 1 1では、竈戸ですね。かまどを焚いて塩を焼く人たちが貿易に転じるということを書いてあります。**史料 1 2**では漁民の人たちが貿易に転じる。それから**史料 1 3**では、廣州望縣の人々の、農業をする者ですね。最後の一文から鋤、鍬を捨てて貿易活動に従事するということが見えています。

このように色々な業種の人たちが貿易に参入するようになってきております。当時の中国は、決められた業種の戸籍に登録され、他業種に移ることは許されない建前でしたから、著しい違反行為をしてまでも貿易の利を求めたこととなります。

史料 1 1 『明経世文編』 卷206、朱中丞覽餘集二 朱紉「計處海防竈船事」

而海禁漸弛、馴致竈戸舍其本業、競趨海利、名曰補柴滷、曰補塩課、實則與賊為市。利歸勢豪、害叢官民。

而して海禁漸に弛み、馴致の竈戸はその本業を捨て、競って海利に趨き、名は柴滷を補うと曰い、塩課を補うと曰ふも、實は則ち賊と市を為す。利は勢豪に歸し、害は官民に叢る。

史料 1 2 鄭若曾『籌海図編』 卷11、經畧一、叙寇原

都督萬表云、向來海上漁船出近洋、打魚樵柴、無敢過海通番。近因海禁漸弛、勾引番船紛然往來海上、各認所主、承攬貨物裝載、或五十艘、或百餘艘、或群各黨、分泊各港。又各用三板草撇脚船、不可勝計。

都督萬表云ふ、向來海上の漁船近洋に出で、打魚樵柴するも、敢えて過海通番すること無し。近ごろ海禁漸に弛み、番船を勾引し紛然として海上を往來し、各おの主とする所を認め、貨物の装載を承攬し、或は五十艘、或は百餘艘、或は各黨群をなし、各港に分泊す。又各おの三板草撇の脚船を用ひ、勝計すべからず。

史料 1 3 『光緒・廣州府志』 卷15、輿地志

廣州望縣人多務賈、與時逐以香糖果箱鐵器藤蠟番椒蘇木蒲葵諸貨、北走豫章吳浙、西北走長沙漢口、其黠者南走澳門、至東西二洋倏忽千萬里、以中國珍麗之物相貿易、獲大贏利。農者以拙業力苦利微、輒棄耒耜而從之。

廣州望縣の人多く賈に務め、與に時に逐めるに香・糖果・箱・鐵器・藤・蠟・番椒・蘇木・蒲葵の諸貨を以てし、北は豫章吳浙に走り、西北は長沙・漢口に走り、其の黠者は南して澳門に走り、東西二洋倏忽（しゅっこく）千萬里至り、中國珍麗之物を以て相ひ貿易し、大ひに贏利を獲る。農者は業拙く力苦するも利微かなるを以て、輒ち耒耜を棄てて之に従ふ。

【全国規模の貿易活動】

また**史料 1 3**は、商品をどのようにこの海域にもたらすかということのヒントになる史料でもございまして、冒頭のところで、廣州望縣の人が諸貨をもって、「北は豫章吳浙に走り、西北は長沙・漢口に走り」、わるがしこい者は、「南して澳門に走り、東西二洋の千萬里至り、中國珍麗之物を以て相ひ貿易」するとしており、各地に至って、色々なものを集めて来る。そして、これを貿易に供するんだということがうたわれております。つまり沿海だけでなく、内陸各地から貨物を集めて海外私貿易に供するのであり、貿易活動の利益は、広く浸透してしまっているわけです。

【移住】

史料 1 4には、有名な王直などにつながると思われる、海外に移住潜伏する者が現れています。要するに今度は中国の人たちが日本などに行って、そこにひそかに住んで、この海域で貿易を営む。その数は千数を下らずということになっておりまして、この海域を覆うまた別の秩序が、実際に日本などに渡ってしまう中国人の商人も加わって形成されている可能性があるということが言えると思います。

これらを総合して唐樞という人が感想を述べた文章が**史料 1 5**です。華夷は同體で、日本と中国、琉球、その他、それぞれ特産品がある。ゆえに貿易は絶ち難く、有無相通じるということで、利のあるところ、人必ずこれに趨くということです。もはやそれぞれの経済関係はしっかりと取り結ばれてしまっているの、これを取り締まって貿易を禁じるというようなことが実に不合理であったということがここにうたわれているわけでありませう。

史料 1 4 『明経世文編』巻283、王司馬奏疏 王忬「倭夷容留叛逆糾結入寇疏」

自嘉靖二年、宋素卿入擾之後、邊事日隳、遺禍愈重、閩・廣・徽・浙、無頼亡命、潜匿倭國者、不下千數、居成里巷。街名大唐。有資本者則糾倭貿易。無財力者則聯夷肆劫。

嘉靖二年より、宋素卿入擾之後、邊事日ごとに隳れ、禍を遺すこと愈いよ重く、閩・廣・徽・浙は、無頼亡命し、倭國に潜匿する者、千数を下らず、居して里巷を成す。街名は大唐なり。資本有る者は則ち倭を糾めて貿易す。財力無き者は則ち夷と聯りて肆劫す。

史料 1 5 『明経世文編』巻270、禦倭雜著、唐樞「復胡梅林諭處王直」

順其請有五利、……二曰、切念華夷同體、有無相通、實理勢之所必然。中國與夷、各擅土產、故貿易難絶、利之所在、人必趨之。……

その請ふに順ふに五利有り、……二に曰く、切に念ふに華夷は同體、有無相通ずるは實理の勢ひ之必然とする所なり。中國と夷、各々土産を擅らにし、故に貿易絶ち難く、利之在る所、人必ず之に趨く。……

16世紀の中国貿易陶磁の動向

東シナ海海域にかかる圧力というんでしょうか、経済的な圧力がこのようなあり方をしているということを申し上げようとしてきましたが、そこに景德鎮の問題が絡んできます。景德鎮は16世紀になりますと非常に発達をして、初めに用語として出しました、資本主義的な生産様式の萌芽が現れたということをも中国の学者が指摘しています。ほとんど、資本家がいて無産階級がいるような形で生産活動が行われるようになります。蘇州の方では絹織物をつくる仕事とかが非常に発達しますが、景德鎮につきましても、非常に民窯生産が発達していきます。

景德鎮の場合、官窯と民窯との関係が明の時代では重要になるんですけども、当初官窯というのは、民間の窯元——商業的に焼き物をつくる人たちを税金の代わりに賦役として官窯に出仕をさせて、体ごと来させて、只働きで、手弁当で生産をさせるという形式でやってきたわけです。しかしそれがだんだん銀納に代わっていきます。明の後期になってきますと、段階を踏みますけれども、最終的には建前上そういうことだけれども銀を納めればもう官窯に来なくてよろしい、というような形になって、その分自分の産業としての窯元での窯業生産に従事するということになりますから、ますます生産力が向上します。それによって大量の商品が全国市場に出て行くということで、その一部は海外にも売り出

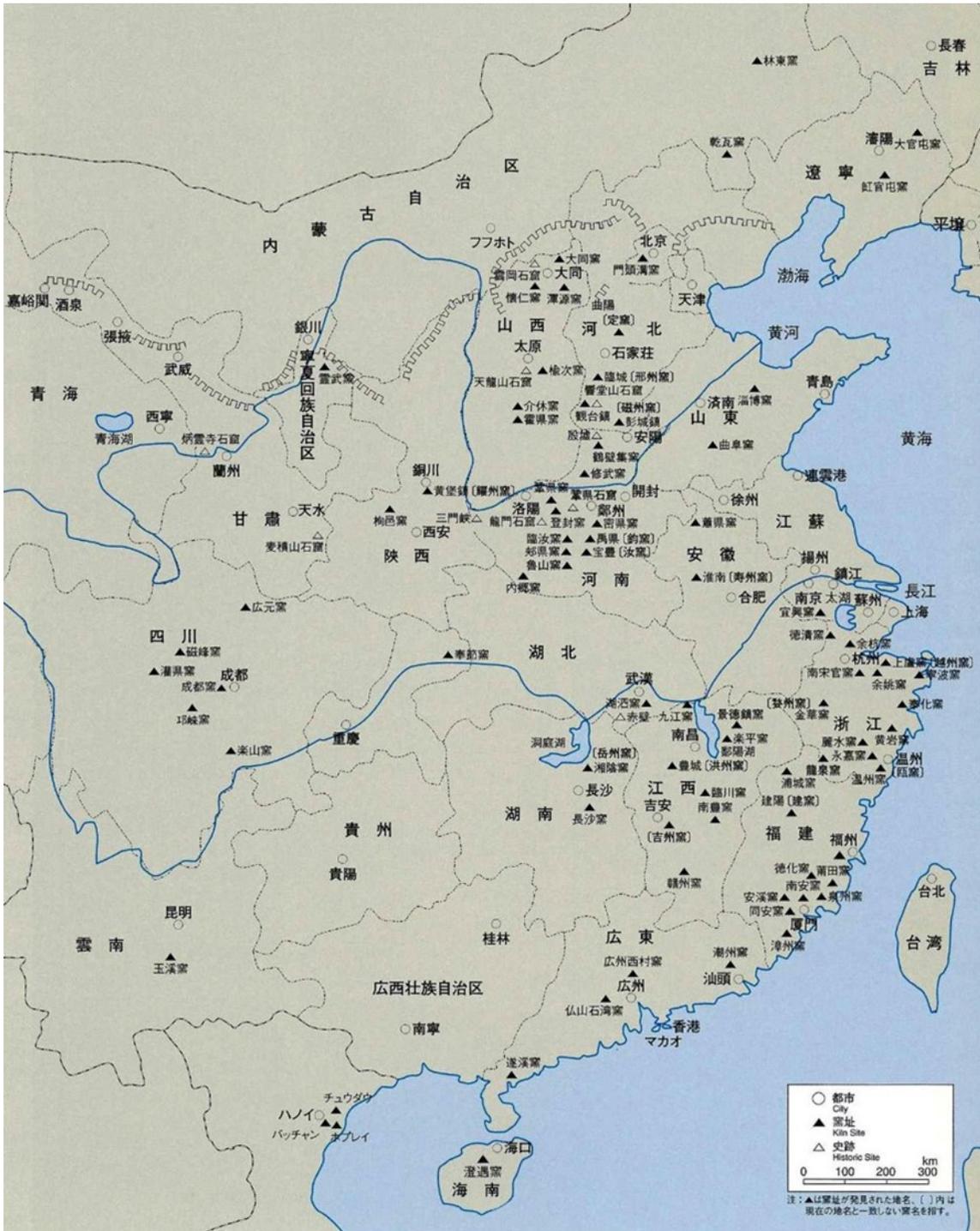


図4 中国古窯址分布図／大阪市立東洋陶磁美術館『東洋陶磁の展開』1999より

そうとして、一つの輸出圧力みたいなものが強まります。

また、沿海地方の浙江・福建・広東の方は、とくに福建などは基本的には穀物生産の少ない地域で、商品経済を営まないと穀物の輸入ができないという地理的条件を昔から持っていましたけれども、その中で、景德鎮の全国市場を制覇した焼き物にある意味対抗して、あるいはそれを利用して、景德鎮の亜流の品物をつくる。廉価につくる。そして土地の地理的な便利さを利用して輸出に載せてくる。それで生きていこうとしますから、ますます海域への輸出圧力が強まることになります。

また龍泉窯につきましては、15世紀ぐらいまでで非常に生産が落ちてしまうわけですが、これはまたアジアの諸国が青磁という龍泉窯の得意の製品に対しての思い入れというんでしょうか、希求が非常に強かったようです。日本も非常に、先ほど威信財の用語が出ましたが、それ求める力が強かったものですから、これまたさまざまな窯で青磁をつくって輸出する。特にまた漳州窯は基本的に景德鎮のコピー生産が始まりですけれども、青磁もつくるといようなことになって、それでまた産業として大いに勃興していく。これがさらに商品輸出の圧力を加えてくることになります。

また、ルソン壺のお話が出ましたが、明代の『肇慶府志』——広州のあたりの肇慶府の府志ですが、ルソン壺を含む壺型の容器を大量に生産して、表現としては「百越に遍し」という、沿海地方にあまねく輸出をしているという言い方をしています。そういったものがおそらく日本に流れてはルソン壺になっていった可能性もある。そういうふうに陶磁器産業の発達によって輸出圧力が強くなってきているということが言えると思います（図4）。

実は本当はさらに貿易陶磁の話をしなきゃならないわけでありましたけれども、ちょうど時間となりました。どうもありがとうございました。